

## 論文要旨

江口 聡

本論は、統合失調症への早期介入・支援を包括的に行うことを目的に、初回エピソード精神病（FEP）や若年の統合失調症に焦点を当てて研究を行った。

研究 I では多様な状態を示す統合失調症患者の心理社会的な状態を簡便かつ正確に測定するために GAF の問題点とされる検査者間での一致度を高め、症状と社会機能を測定することを目的とした修正版の GAF を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。今回作成した修正版の GAF は modified GAF-Symptom-Functioning (mGAF-S-F) とし、mGAF-S-F は症状評価の modified GAF-Symptom (mGAF-S) と社会機能評価の modified GAF-Functioning (mGAF-F) から構成される尺度である。

信頼性では統合失調症の診断を受けている研究参加者 14 名について 3 名の評価者（精神科医療従事者）が mGAF-S-F, mGAF-S, mGAF-F を用いてそれぞれ実施した。分析として、得られたデータを用いて級内相関係数の分析を実施した。妥当性は研究参加者である 32 名の統合失調症患者に対して mGAF-S-F と GAF, mGAF-S と PANSS の各尺度, mGAF-F と SOFAS を実施し、分析としてそれぞれで相関分析（Pearson の積率相関係数）を行った。結果として、信頼性では mGAF-S-F, mGAF-S, mGAF-F のそれぞれで高い評価者間一致度が確認された。また妥当性においては mGAF-S-F は GAF との強い正の相関が、mGAF-S は PANSS 各尺度と中程度から強い負の相関が、mGAF-F は SOFAS と強い正の相関が確認された。

以上のことから mGAF-S-F は症状と社会機能の 2 つの側面を有していることが示された。また、本研究では様々な教育、訓練の背景を持つ

評価者間において高い一致度が示された。これらのことから多職種でかつ多様な状況が影響する精神科領域の臨床や研究において、mGAF-S-Fは患者の社会機能と症状を評価し、患者の社会生活を行う程度について評価する尺度として有用であると考えられる。

研究Ⅱでは、統合失調症の中核症状である認知機能障害の発症早期の状態を明らかにするために、FEPを対象に通常治療の経過における認知機能の変化と社会機能および心理的状态の変化の関連について検討した。

方法としてはSIPSを用いてFEPの基準に該当しかつ抗精神病薬の服薬が16週以内であった24名の研究参加者に対して、認知機能(BACS)、症状(PANSS)、社会機能(mGAF-S-F)、心理的状态(WHO-QOL)を、開始時をtime1、time1から約2年後をtime2としてそれぞれ2回ずつ実施した。それぞれの関係や変化を検討するために相関分析(Pearsonの積率相関係数)およびStudentのt検定を行った。

結果、time1とtime2において認知機能と他の評価の関連が変化し、治療が経過していくと認知機能と社会機能や心理的状态との関連が強くなることが示された。具体的にはtime1では認知機能とCP換算量の関連が中心で、運動機能とQOL環境、注意と情報処理と症状で正の相関、遂行機能とQOL全体で負の相関が確認された。一方で、time2において言語性学習が社会機能や症状、QOL全体領域、QOL平均と、言語流暢性がQOLの心理領域と正の相関を示し、time2において言語的なやり取りに必要な能力が社会機能やQOLと関連することが示された。また注意と情報処理が社会機能、生活状況と正の相関、症状(陰性症状)と負の相関が示されており、スピードが求められる課題が症状、特に陰性症状と関係があることや、社会機能や生活と関連があることが示された。認知機能の特徴として、運動機能と言語流暢性はtime1時において平均

から *1SD* 以上障害されており，かつ抗精神病薬との関連も低いことから FEP 特有の認知機能障害であると考えられる。また運動機能や言語流暢性は通常治療の経過では改善しにくいことも示された。一方で，2 年間の通常治療経過後では症状や心理的状态は有意な改善を確認したが，症状や心理的状态としては軽度から中程度の障害，社会機能の障害は中程度であり，客観的な状態として十分な回復ではないことが考えられる。そのため，認知機能のリハビリテーションや薬物療法以外に FEP を含む統合失調症患者の症状や心理的状态のリカバリーを促す方法を検討することが必要であると考え，それについて心理的なアプローチの効果について研究Ⅲで検討した。

研究Ⅲでは，若年の統合失調症患者に対する心理的介入について，デイケア内の臨床で実施している *Meta-Cognitive Training (MCT)* の効果について 20 歳代の統合失調症患者を対象とした観察研究を行った。

方法として臨床群を MCT 実施群，対照群を SST 実施群と設定し，20 歳代の統合失調症患者を対象に実施した。両群の研究参加者の背景因子にばらつきが確認されたため，背景因子の均質化のため傾向スコアでマッチングを行った。結果，MCT では 7 名（男性 6 名，女性 1 名），SST（対照群）では 7 名（男性 5 名，女性 2 名）の合計 14 名が対象となった。評価項目をメタ認知，洞察，自尊心，自己意識，症状，社会機能，CP 換算量とし，それぞれを 2 群の開始前，開始後に取得した。得られたデータを用いて，MCT 群と SST 群を被験者間要因，測定時期を介入前と介入後とした被験者内要因で分散分析を実施した。また，MCT 群は各セッション後に自由記述アンケートを実施し，KJ 法を援用した方法で分析した。予後として 2 群それぞれでデイケア終了時の転帰を予後と設定し，Fisher の正確確率検定を実施した。

結果として、自尊心の評価及び受容に対して群間の主効果が確認され、傾向スコアマッチング前のデータを援用した考察から自尊心（評価）の改善の可能性が考えられた。MCTについては、認知バイアスの理解や対処だけではなく、ノーマライゼーションや他の人の考えを取り入れる要素があること、同世代のグループで行われることによる集団の発達援助的な要因、デイケアの中での即時的なフィードバックが行われる環境であることが自尊心の改善へ影響したと考える。また、MCTでの理解については、セッション後のアンケートから「認知バイアス理解因子」、「自己洞察因子」、「対処因子」が確認され、MCTの目的が達成されていたことが示された。予後においてはデイケア終了時では有意な差は確認されなかった。自尊心への影響が今後の状態に影響することが先行研究から推察されることから、今後は RCT を用いたフォローアップを含む効果研究の検討が必要であると考えられる。また、メタ認知トレーニングにおけるブースターセッションについて検討することもメタ認知トレーニングの効果を強化するために有効であると考えられる。

以上のことから、本研究において若年の統合失調症患者において通常治療と MCT を並行して実施することにより、通常治療で生じる症状や認知機能の改善ではない自尊心という心理的な側面に対する改善の可能性や、認知バイアスの理解やその対処についての理解が示された。そのため、若年の統合失調症患者に対しての MCT に有用性があると考えられる。また、我が国では、統合失調症に対する CBT の普及は十分ではないため、MCT を統合失調症への心理的介入の入口とすることにより、今後統合失調症や精神病への CBT の普及に MCT が貢献することが考えられる。